

Title	奈良朝時代に於ける寺院経済の研究(竹内理三著, 大岡山書店發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.2 (1932. 7) ,p.179(325)- 180(326)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0179">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0179</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書評

奈良時代に於ける

## 寺院經濟の研究

(竹内理三著大岡山書店發行)

厭離穢土、欣求淨土を説いたり、人はパンのみにて生くる能はざること教へる宗教が、往々にして現世の經濟生活とは没交渉であるとか、或はそれと對蹠をなすもののごとく考へらるることはあるけれども、事實は必ずしもさうではなく、殊に宗教が時代文化の中心をなせる場合には、その政治經濟に及ぼす影響は極めて大である。奈良時代はわが上代史において最も華かな文化を生んだ時代であり、その文化の中心は佛教であつた。而もこの佛教文化は敎理研究の華やかさに非ずして寺院經營の華やかさにあつた。造塔の寺は國の華たるべきものであり、國の富を傾けて造らるるものは東大寺であつた。かくて奈良朝時代は我國に於ける佛教文化が精神的にも、經濟的にも、時には政治的にも、その支配的地位を獲得せる第一期を劃するものである。『従つてかかる時代における寺院の經濟的機構と、その社會的意義とを闡明にすることは、當代文化を理解するために、最も重要なことであり、さうして本書はその目的のために生まれたものである。まづ第一章奈良朝文化の成立においては、寺院の經營を一般貴族及び地方豪

書評

族に委ねられた天武以後の政策が、聖武天皇に至つて破棄せられ、國家經營になつた事情と、佛教の普及程度とを明かにし、第二章寺院成立の要素においては、寺院の構成と資財の内容をのべ、第三章においては寺院を經營維持し、僧尼を供養扶持するところの檀越と知識とについてのべ、第四章經濟機構においては、布施物、寺奴婢、寺封、寺田をのべ、殊に奴隸についてはそれがすでに經濟活動の主體をなすには餘りにその活動が貧弱になつてを、正しく奈良朝は大化前代の奴隸經濟時代から次の莊園經濟時代への過渡期と見るべきものとなし、第五章經濟經營においては金融事業と寺田經營とを論じ、第六章經濟管理及び消費においては、寺院收入の概算、資財の管理、資財帳の作成、資財帳による消費の考察、國家管理權の減退をのべ、第七章僧尼の經濟生活においては、僧尼の素質とその生活をとき、第八章寺院經濟の社會への影響においては、福田事業と國家財政難の將來とを論じ、後者については、寺田の擴張集中が政府の最も重要な財源であり、また政治の根柢であるところの班田制度に對して大いなる脅威を與へ、また堂塔伽藍の經營が國家の負擔であることが國家財政の窮乏をして益々甚しくせしめ、従つてこの時代に法俗混交政治の結果たる法界腐敗のことがなくとも、國家の寺院政策が將に轉換すべき時機に面してゐたことを論じ、第九章平安朝佛教への轉換においては、寺院が奈良朝において有したる朝廷との關係を貴族との間に有するか、或は寺院自らが貴族化しなければならなかつた所以を明にし、かくて全巻を通じてよく文獻と數字とを駆使して、實證的に寺院經濟を解明された努力に對し、敬意を表せざるを得

ない。近時經濟生活の重要性が益々強調せらるる結果として、わが史學界においても經濟史的研究が特に著しくなつたが、本書のごとき、その良き結果の一つであらう。(松本芳夫)

### 徳川封建經濟の研究

(高橋龜吉著)  
(先進社發行)

本書は著者高橋氏が氏一流の經濟史觀に立脚して、徳川時代の經濟的發展と、當時の最も重要商品たる 燈油・生糸・棉花・砂糖等の商品經濟方面から論究したものであつて、徳川時代に於て漸次資本主義的産業組織の發達し來れる實相を究め、以て明治時代の資本主義への連鎖を説明したものである。蓋し一口に徳川三百年の封建時代と稱するも、實はその初期と末期との間には政治上經濟上その他文化の各方面に於て著しい變遷が存するのであつて、徳川時代に於ける或る一つの文化現象を捉へて論究せんとする者は必ずや全時代を通じての發展の過程を辿らねばならぬ。然るに徳川時代の經濟史に關する文獻は頗る多きに拘らず、此の時代の經濟生活の發展過程を論述したものは比較的稀少である。従つて既に徳川時代に於て經濟社會が或る程度まで資本主義化して居たとするも、明治時代に於て歐米の資本主義を受け入れるに好都合なる素地が、どの程度にまで形成されてゐたかを詳細に知ることが出来なかつた。然るに本書に於ては此の點が最も具體的に解説されてゐるのである。所が又、著者によれば、徳川時代の資本主義的經濟組織の發達は封建制度の爲に著しく阻止されてゐたとする。即ち資本主義的經濟組織の發達が封建制度を崩壊せしめる要

因とはなつたが、その反對に亦、資本主義的發達が封建制度そのものの爲に幾多の掣肘を受けて、或る程度に制限されたのである。著者は此の事實を説明せんが爲に、當時の爲政者側から、諸産業の上に加へられた幾多の政策に就て、詳細に論述するところがある。次に本書編成の概要を見るに、先づ第一編に「徳川封建制度の經濟的機構」と題して、徳川封建經濟の本體を詳述し、第二編の幕末に於ける封建制度崩壊の經濟的研究」に於ては徳川封建制度の崩壊の經濟的必然性を説いてゐる。共に精細明達なる説明であつて、氏の經濟史觀を窺ふべき貴重なる論說ではあるが、量的に見ても本書の序論と認めて差支なきものであらう。即ち本書の主部は第三編以下であつて、第六編までの各編に於て、燈油・蠶糸・棉・甘蔗等の商品に就て、その生産の發達や市場の變遷や幕府及び諸藩の政策などを述べてゐる。就中第四編の「徳川時代に於ける蠶糸業の變遷及發達」は、幕府及び諸藩の蠶糸業保護獎勵、機業の發達に伴ふ蠶糸業の發展、幕末に於ける生糸の海外輸出、織物・製糸の分業化に伴ふ生糸の商品化、更に養蠶業の發達等に就て詳細に説述してゐる。恐らく蠶糸業に關する最も纏つた文獻の一であらう。此の他第三編の「徳川幕府の燈油價格の統制と其組織」に於ては、製油の配給や價格に對する幕府の統制を詳述し封建經濟から資本主義經濟に移る過渡期に於て幕府の採用せる折衷的政策を説明してゐる。第五・六の兩編に於ては、それぞれ棉花と甘蔗について、その經濟的發達の事情を述べてゐる。さて、經濟史觀に立脚する學者はとかく偏見や獨斷や誇張に陥り易いものである。本書に於ても或は此の種の缺點が見られはしまいかとい